フォト･ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００６
対談：佐藤祐介　×　土田ヒロミ

Guardian Garden PRODUCED BY RECRUIT

この対談は、出品者と選考員が、展覧会を目前にして作品の理解を深めようという主旨で行うものです。
３週目は、チラシ配布サービス（ポスティング）の仕事をしながら東京の街を撮り歩いた佐藤祐介さんと選考員の土田ヒロミさんです。

●ポスティングという仕事

土田：僕はあまり知らなかったのですけれど、「ポスティング」という言葉は、昔からありましたかね？　現代を象徴するものなのかなと思ったんですが。

佐藤：昔は「チラシ投げ込み」って言ってたみたいです。今は、アルバイトの求人情報に「ポスティングスタッフ」って書いてありますね。僕もやるまで全く知らなかったけど、街を徘徊して苦しんでいる若者がたくさんいるんだってわかりました。その中で、僕は写真が撮れたので。

土田：新聞の折込広告は以前からあるけど、それ以外にポスティングという形で、情報が過剰に挿入されていく。そういった状態になったのは一体いつ頃なんだろう。テレビでも、インターネットでもなく、物理的に差し込まれていく。おそらくその効果があるから存続しているんだと思うんですけど。佐藤さんはこの仕事をどのくらいやっていたんですか？

佐藤：期間が分かれていて、２００３年の１月から１年ちょっとで、大体２００回。それで、少しして、この１年くらいの間にもう１００回ほどやりました。

土田：２００４年くらいから、疲れて一度少し休んだんですか？

佐藤：精神的にもきてしまう仕事だったから、かなり破綻してしまいまして。１回辞めたんです。

土田：やっている人達はどういう人が多いのですか？　時間のある主婦が多そうですけれど。

佐藤：１０代もいますし、２０代で音楽を目指している若者とかが圧倒的に多い。主婦の方々はオフィスに行かずに、自宅にいてチラシが委託という形で届いて、団地や近所でやってるみたいです。僕達みたいに若い者は、まずオフィスに行って、その作業所でチラシを積んで勤務地にバイクとかで向かう。

土田：配るチラシはどういうものが多いんですか？

佐藤：その日によって違います。宅配のピザや、寿司とか。多くて一日に３種類ですね。

土田：女性のマッサージとか風俗関係のものが入っていることもありますけど、そういうのは？

佐藤：最近厳しくなったんですね。でもやってる人もいます。僕のやってた会社は、そういうのはやらないという決まりがありました。

土田：だけど、新聞はよくてもチラシはお断りと書いてある所もあるでしょう。もしかしたら、チラシもその人にとって有用な情報かもしれないのに。

佐藤：その書き方も、「ピザだけＯＫ」って書いてあるところもあるし、様々です。朝渡される地図に「配布禁止」と書いてあって、そういう所が必ず１つくらいはある。そこには入れないんです。

土田：一日のチラシの量としてはどのくらい？

佐藤：新聞屋のカブ、バイクでなんですけど、後ろにバカでかいトランクがあって、前にも大きなカゴがあって、ぎっしり。朝９時くらいに始めて、暗くなるまでやります。ノルマの数字があって、そこに近づくまではやりますね。僕にとっては、それは厳しい世界でしかなかったんですけど、頑張らなきゃいけない人って結構多いんです。

●「私」と「他者」の接点

土田：厳しいっていうのは、精神的プレッシャーがあるんでしょうね。このハードな仕事をやろうとした動機というのは、１つには生活の為ということ、もう１つは表現の方法論ということがあると思うんですが、どちらが先なんですか？

佐藤：やっぱり写真を撮る為にこの仕事を選んでるんです。街に出て写真を撮るということをずっと続けてきて、これからも続けていきたいと思っています。この仕事は、街を歩きながら１日中写真も撮れるということで選びました。東京の街を隅から隅まで見てみたいという欲求もあって。

土田：自分の主体的な意思で歩き回ろうとした時に、自分の好き嫌いや、かつての記憶や思いが入ってきて場所を選んでしまう可能性がある。でもこの仕事なら、普通は絶対に自分の意思では行かないところへ強制的に行かざるを得ない。そういう「装置」としてこの仕事は面白いですね。

佐藤：「どこに行くかわからない」というのがとにかく楽しくて。配布場所は当日、地図を渡されるんです。とんでもない場所に行って下さいって言われると、遠ければ遠いほど、ワクワクする。ここも東京の一部なんだなって思うような場所の方が楽しめましたね。

土田：仕事の為にポスティングをやって、やっていくうちに写真を撮ろうと考えたのかなと思ったんだけど。むしろ写真ありきなんだ？

佐藤：僕は、人があまりやりたがらないようなきつい仕事を選びたがる性質があるみたいで。最初に選んだバイトがラブホテルだったんです。掃除とかフロントとか。普通はそんなのやらないんだろうけど、僕の場合はそのあと部屋にいって写真を撮るという。そういうことをやりたがってしまう。実際は、きつかったんですけどね。

土田：ラブホテルなんて使用前・使用後っておもしろいんじゃないですか？梯子とか持ち込んで高いところから俯瞰したら面白い写真になりそうですね。まあ、なかなか時間ないしね。

佐藤：僕はあまり工夫をしないんですよね。写真を撮ることに対して時間をかけずに……。

土田：きっと、身体的な作業で、ある程度、充実していく自分がいるんでしょうね。

佐藤：ポスティング中も、いい景色を見つけてもそこで考えたりしないで、

気付いたらもう撮ってしまっている。あとで、作品をまとめて見返してみても、やっぱり何ものぞいてなくて、ノーファインダーでアッという間に撮ってしまった写真が殆ど。他人の家に向かって撮る時って、ファインダーをのぞく仕草すらしちゃいけないんじゃないかっていうのもある。

土田：僕は、ポスティングという仕事の持ってる構造の中に、写真的な身体行動と似ているところがあると思うんです。１つは、いつも能動的に他者に向かっていくところ。もう１つは、ポスティングの場合、出掛けていって出会う場所が、「私」と「他者」の接点、パブリックなものとプライベートなものの境界のところ。写真で人間を撮る場合も、他人の中に踏み込んでいくし、でもギリギリ踏み壊さない。そういうせめぎ合いの関係がある。そして、写ってくる内容を見てみると、顔を見せない現代の都市というか、匿名であることに徹しようとする市民の姿が浮かび上がってくる。多くの人は、目立とうとしながら実は匿名でいたいと思っているのではないか。だから向かっても向かっても匿名でしか返ってこない。そういう現代の、撮る側と撮られる側の関係性を象徴的に表した作品だと思います。

佐藤：それはポスティングそのものの仕事と繋がっていますね。

土田：そして、必要かどうか分からないものをポストという口の中に放り込んで、頬張らせようとしている。必要な時は、別の方法で十分情報が得られるのに。そういった非常に過剰な情報化社会の状況そのものを表徴している現場でもあるから、まさに現代のドキュメンタリーとしてはおもしろい。

佐藤：チラシを配っている自分の状況が、それだけで情報化社会の表れなんですね。

土田：もう１つ、この写真の面白いところは、物理的に繰り返し、繰り返しやっていく、いわば愚鈍なところ。そのような身体的な作業性が、今では表現の場でも少なくなりつつある。デジタルを使えば、イメージを机の上で作ることもできるわけだから。しかし、写真の身体性っていうのは、やはり愚直に現場に立ち、なおかつそのことを繰り返すことは大事なことだと思う。そういう意味で説得力を与える作品だと思う。写真１枚１枚の質を問う問題ではない作品だ。

佐藤：そうですね。僕も今回の作品では、行為を見て欲しいっていうか。

土田：展覧会では、あなたが何千軒もポストの黒く開いた口をめがけてチラシを放り込んだ、そのことのリアリティが出るといいですね。

佐藤：そうですね……。僕としてもこの作業のことで展示をするつもりではいたんですけども、どうやら個人情報的な問題もあって、写っているもので個人を特定できてしまうと、誰かに迷惑をかけてしまう恐れもあって……。僕の続けてきた「ポスティング」ということに関しての表現をしたい思いはもちろんとてもあるんですけどね。

●東京の街歩き

土田：撮影場所を書いたキャプションは入れた方がいいと思いますよ。川崎から葛飾から目黒区。東京をニットを編むようにガーッと繋いでいくわけですから。

佐藤：そうじゃないとやっぱり思いが伝わらないから入れたいですね。難しいのもあるけど。僕は、いつも配った地域を地図にマークしているんです。

土田：地図はおもしろいですよね。展示でも、地図にマークしたものを出せばいいんじゃないですか？　……この地図を見ると、まだやらなくちゃいけないところがいっぱいあるな（笑）。

佐藤：そうなんです。東京って広いんだなあって。こうしてみると、３００回くらいやってこれしか埋まらないのかって思いますよね。

土田：僕もやっぱり３０歳くらいの時にこういう地図を使った作品で展覧会をやったことがあってね。湘南で、写真を写したところのポイントを地図上に矢印を記して、撮った方向だけ書くわけです。撮られた写真を見ると「なんでこれが？」というぐらいの落差があって、面白いんです。写真で具体として表すと地図というものの不完全さがわかります。地図上の記号を読みとって具体的な風景として、イメージするのですが、与えられる実際の写真との落差が非常に大きく、戸惑ったりするのです。そこが面白い。

佐藤：楽しいんですよね、撮った場所から何かを考えるのは。配った場所一つ一つ、写真を撮っているから結構覚えてるんですよね。その思い入れみたいなものがある。

土田：写真だけだとバラバラな情報なんだけど、地図を入れることで全体を繋いでいけるということもありますね。知識や情報で知っているということよりも、具体的にこれらの場所を歩くことで知ったということは、すごく大きいこと。写真家がいつも現場に立つということは基本的な部分だと思います。しかしこれだけ幅広い東京というものを身体行為を通して――ということなのですよね。

佐藤：街一つ一つが違うし、街の匂いみたいなものを感じながら歩いてきました。

土田：都市を自分の足で知覚したということだよね。

佐藤：僕はもともと東京っていう場所が好きではなくて、どこか片田舎の方のちょっと安心できるような環境が好きだったんです。それでもやっぱり東京は知らなきゃいけないなと思ったこともあって。都心部にこだわったのは、最近なんです。

土田：結構東京って、豊かなものでしょう？

佐藤：うちは、品川の戸越の辺りですけど、まだわけのわからないところが残ってますね。

土田：色んなものがあるよね。僕も目黒の辺りなんだけど、ちょっと歩くと面白い。立派なお屋敷があって、なんでこんなところに住めるんだっていうね。その逆もあったり、自然公園があったり、商店街があったり、本当に多様ですよ。

佐藤：１日１５００から２０００軒くらい回るんですけれど、回っていると１軒くらいものすごい家がありますよね。

土田：例えば、こういう巨大なビルやマンションのポストがずらっと並んでいて顔の見えないところと、個人の庭があったりする表情のある家と、ポスティングする時に大きな違いがありますか？

佐藤：１つだけのもの、その家にしかないものというか、実際に置かれているものではなくて、かもし出している雰囲気っていうのにやっぱり惹かれます。

土田：マンションで配ると、それは作業をそこでしているだけだけど、例えば一軒家に行くと、そこに庭があって、カーテンが揺れていたりして、ある種の人格性がある。そこへあなたが配布する時は人格と人格がコミュニケー

ションする。そういう快感があるんじゃないですか？
佐藤：色んな思いがあって、ホッとする感じもあるし、見たくないという思いもどっかにあるんですよね。

土田：それはあなた自身が、見てはいけないという意識があって？

佐藤：それほど強い意識ではないんだけど、ただ単純に興味がないって言ってしまえばそれまでなんですけども。

土田：あまり興味示しちゃいけないだろうという自制心と、そんなことやっているとまたポスティングが遅れるということもあるんじゃないですか。ホッとするのは、多分、自分が機械的に労働をする人間じゃなくて、人格を持った自分自身を取り戻す時間なのかもしれないなと思うのですけれど、どうですか？

佐藤：やっぱり銀座とか都心の方で写真を撮ろうと思って歩いていても、なかなか撮る場面がなくて、それが寂しいなと思う。ところが東京を、ちょっと１本、道を入っただけでそういう世界が広がっているということに驚いて。他人のうちだし、自分の居場所とまでは言わないけれども。歩いていて自分が興味を示すものと出会えたらやっぱり楽しいかな。

●人間に向かっていく

土田：この仕事は、かなりの作業量、膨大なエネルギーをもって成した仕事ですから、できるだけきっちりと自分の中で自己評価して、そして他人も評価してくれるように、できるだけ大事にしないといけないと思うんですよね。
ちょっとやってみましたっていうことで、終わりにしてしまわないようにしなければいけませんね。実際に写真を見た時に安易な作業に見られてしまいがちな写真でもあるわけですよ。だからこそ自覚的に「そうじゃないんだよ」って大袈裟に。１点１点の写真のイメージの問題じゃなくて、全体の作業量をどう表現するかの問題だから。

佐藤：そういうのを怖がってはいないつもりなんですけれども、どこかでやっぱり何か抑えようとする力が働いてしまう。

土田：その理由の１つは、主体的に自らが、例えばベトナムに撮影の為に出かけて行って撮っているというのではなくて、自分の表現をビジネス仕事と絡めていることに対して不純じゃないか、というのがあなたの中にあるのでは？　でもそのことは考えないことですね。今度の展覧会と写真集だけではない、よりいっそうこれを完結する何かがほしいですね。もう１回きちんとこの上に作品を作った方がいいのかもしれない。次にいく前にこれをもう少し固めたい感じがします。

佐藤：やりようはいくらでも。写真がとにかくたくさんあるんですよね。それをいかにまとめるかっていうのが……。

土田：難しいですね。限りないものを何らかの形で限定して見せていかないといけない。印刷物なんか特にそうですけれども。例えばＣＤで見せる方法もある。膨大な量を見せられるし。

佐藤：そうですね、何かやってみたいですね。

土田：このポスティングの仕事で街歩きをして、日本や東京について、案外いいなって思う発見が多いのか、それとも悲惨な現状を目の当たりにしたというような事の方が多かったか、どちらなんですか？

佐藤：基本的には、いい部分をどっかで見つけようとしている……。例えば、子供に向かっていくことが多くて、救われてしまう自分がいる。いい部分は写真にも残したくなるし、悪い部分は撮らない。僕は、人とはずれているところで生きている感じがあって、こんなバイトも選んでいるし。東京というものに近づいていけばいくほど、おもしろくないと思えるような状況が多い。それを表現しようとは、僕はどうしても思えないんですよね。

土田：この作品を確立することと同時に、その逆、徹底的に顔のある人間を対象にしてきっちりガチンコにやったらどうですか？　その作業と、２つやっていったらいいと思います。

佐藤：今までそういうの、全然やってきていませんね。自分が撮れると思った人だけに向かっていく……。

土田：真正面に被写体に向かっていくということをやった方がいいと思いますね。
現場に立って、確かにそこに他者がいて向かっていくという。子供でもいい。例えば、最近では、子供をじーっと、かわいいなと思ってながめているだけで、危険人物と見られていないかと不安にかられたりしませんか？　子供だけでも怖いもので、ましてや後ろにお母さんがいたら大変。それをしっかり説得しながら撮っていく。向こうが、肖像権の問題どうのこうのと主張してきたりする現場で、その隙間を縫いながら撮るという、ある意味での私権を侵していく作業をやってみてはどうでしょう。そこからここに立ち戻って、今回のような表現をしたとき、全然違うものができるはずです。

佐藤：そうですね、自分の写真は変わってきてないなとずっと思っていて。なんか、やっぱり思い切ったことやってないんだなと。

土田：僕の作品は、テーマごとに変わるんです。そんな非常識なことをやってますけど、“自分らしきもの”にぶら下がってない方がいいかもしれませんよ。そんなもの、あるようでないんですから。“自分らしきもの”はもっと多様なはず。写真家は、カメラという非人格性の道具を使うから、こちらが変われるんです。現代の最先端のテクノロジーは表現をどんどん変えていくと思う。銀塩でなければ写真じゃないなんて方がいますが、とんでもないことです。絵画の絵具と筆は、あまり変わらないけど、むしろ変化し続ける道具によって自分が変えられていく、いや新しい自分を発見できる写真家って幸せだと思ってます。是非これを機会に頑張ってほしいですよ。

佐藤：こういう時代の中で、表現していくことは、とてもきついことです。今回のテーマであるＮＩＰＰＯＮをどう表現していくかも考えたり、受け入れられる表現を目指す一方で、それに逆らっている自分がいて。やっぱりどんなテーマが与えられたとしても、結局ここにある自分の本質というものがどうしても出てきてしまう。いずれにしても写真を続けていくということだけは決めている。他者に対する優しさだとか、愛情みたいなものを、こんな世の中にも感じることがあって、僕の写真を撮る原動力になっていると思う。そんな部分を人に伝えていきたいと思っています。

２００６年６月１４日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）